

三國名勝図会

泊如竹關係の項 抜粹

山本秀雄

如竹翁墓(前号、旧跡の項にあり)

○如竹翁遺文

君子不可以己之長露人之短。然天地之間、長短不齊、物之自然也。叢爾之軀、豈事々而長哉。必欲炫己之長、而露人之短、則跬步而成仇矣。何也。諱莫諱乎炫己之長、樂莫樂於掩人之短。彼既揚吾之短而不惑、千百人一人耳。然則言人之短者、可謂之種禍。

丙子季秋下泮

散人如竹書

右一幅安房村農民七太郎なる者、家蔵すといふ。文中諱莫諱乎炫己之長の一句、原本乎字の下、炫字なし。長の字短に作る。今上下の文勢を以て詳に考ふるに、上文炫己之長而露人之短の句あり、又此一句下語と對句なり。乎字の上、字なきは、書写の脱誤なること必せり。故に炫の字を置く。短の字を用ゆれば、下句と意重なる故に、長の字を用ゆ。是亦書写の誤なるべし。或は短字を用ゆれば、揜己之短と作り、通せんか。

如竹翁書翰

一、態一筆可申候各の身持夜白念遣に存候に

付申入候

一、御公義御奉公何事不寄專一候

一、親に孝行の義はいしやふを進上申むまきものをもとめ進上申を孝行とおもふなよ

親のはらを立ざる様に仕候事專一候

一、人はわるかれがし我一人よかれがしとおもふ心あれば其ばちにて我身もあしくなるものにて候

一、人はよかれがしとおもふ心あれば其徳にて我身もよくなるものにて候間、其心得專一候

一、大酒をのみひるねを不仕事專一候

一、春年のはかり事は春にあり春にももの種子をまき付不申候得ば年中之被下ものなく候條たねをまき付候事專一候

一、一日のはかり事といふはよひからあんに候て何のかしよくを仕候とおもひ候て辰の時より出立仕候事專一候

右の条々能々心掛候事專一候

本琉球より

如竹花押

六月十三日

屋久島安房之

泊與右衛門殿 泊弥兵衛殿 泊太左衛門殿

同善左衛門殿 同甚兵衛殿 日高茂兵衛殿

同八左衛門殿

○如竹翁詩

試筆

為客多年雜世塵 归来生喜故鄉春

只今天下太平日 茅屋解衣安此身

試筆

曉牕試筆識年豊 喜拳霞盃情意濃

海静波平西海外 乾坤万里悉東風

仲秋

独仰清光三五秋 天涯万里憶同遊

呼童相對語京洛 昔日心知共上樓

重陽

遠去洛城西海涯 对人日々説桑麻

重陽佳節隨鄉俗 濁酒盃中酌菊花。

愛甲氏広隆、其号玄徳、日州救仁院志

布志人也。其為人、質直好學、澹然

寡言。先是五六年前、遠航海、訪予於

海島茅庵。其志在欲聞朱夫子四書新註

之義。雖予不解其義、感其志之不淺也。

不得杜口、胡説乱道者半年、其功未畢、

有予官命、至於廳府。去歲之春、有采

薪之憂、請命帰海島。於是広隆欲問病

安否、再見訪茅庵。茲春初病漸平癒、

而企廳府之行。広隆亦約到廳府。而今

告別、掉婦舟、感離別之懷者不少矣。詩非予之解、而豈敢默乎。綴野詩一絶、述志之所之。奉饒 行色云爾。

分袂春風江畔春 天涯万里布帆新
請君燈下尋書義 再會難期衰老身

正保乙酉暮春日 散人如竹再拜

○藩相の書翰 我藩相、島津久元、山田有栄より、如竹翁へ遣りたる書翰あり。今本佛寺に伝はりて掛物とす。

尚々其許より乗船の儀、此方にて船奉行へ申渡候間可有其心得候以上

一書申入候依て貫僧御事老体と申御煩の由候御暇の儀頻承候今より発候ては咲止千万に候條先島へ被成帰寺、養生候は、来年三月は可有御上の由候間必無相違

薩州様御帰国前に御上尤候恐惶頓首

山田民部少輔 有栄花押
六月五日 嶋津下野守 久元花押

本佛寺 床下

○如竹翁伝

翁、姓は泊氏、名は日章、自ら如竹散人と号す。翁の姓名は、門人愛命喜春が記録に見ゆ。日章は僧名にて、如竹は儒号なり。日蓮宗の徒、多く日の字を名とす。如竹は子路が語に取れる歟。又翁の自著に、養善院日章と記せるあり。大隅国、馭謨郡、屋久島、安房村の人なり。幼にして凡ならず。安房村本佛寺に入て日蓮宗の僧となる。長じて

京師に適き、法華を本能寺に学ぶ。時に藤原惺窩四書新註に訓点を下し、是を講じ、聴徒甚盛なり。同志の僧あり、翁を誘て其講義を聴かしむ。翁一再聴て榮まず。先是惺窩明国に学ばんとし、海に浮で適く。風に逢て薩州山川港に至る。山川の正龍寺に我藩文之和尚訓点の四書新註あり。此四書訓点は、桂庵和尚訓点せしを、文之和尚更に修正す。時人文之点といふ。惺窩是を任持間得和尚より借て写し、京師に帰る。其訓点は、己が力にて始て下すとし世に弘む。惺窩、朝鮮の姜沆に書翰を与へ、謂て曰、我国に於て、新註に訓点を下すは我を始とす。是に跋せよ。翁固より其事実を識る。因て以為く新註和訓の濫觴は吾藩文之和尚の力なり。就て其淵源を探ぐるに如かずと。廻ち辞して西帰し、学を文之に学ぶ。八年にして成る。文之敬待して、常に如竹翁と称す。慶元の間、浪華に遊び、有馬温泉に浴す。時に伊勢侯藤堂高虎の藩相、藤堂某と邂逅す。藩相以為く希代の偉器なりと。還て高虎に勧む。高虎藩相を使とし、幣を厚くして、翁を阿濃津に聘す。室鳩巢、如竹翁伝に曰、慶長中、翁為家貧、往至東郡求仕。故泉州刺史藤堂侯、聞翁有学行、遣使聘之。翁始至見侯於邸、乃曰、云々。此文に、翁東郡に至り、藤堂侯に聘せられ、始て至り、邸に見るといふは蓋伝聞の誤りなり。本藩の旧説、実に本文の如し。故に今鳩巢の説を取らず。翁始て侯に見えて曰、拙僧平素忌諱を知らず。今顧問の職に備はる。故に

言を尽さんと欲す。願くは君公寛容せよ、然らずんば此より辞せん。高虎曰、佞諛の徒の如きは、吾其人に乏からず。先生の直言せるは、吾先生を聘する所以なりと。翁是に由て常に侯の左右にありて讜言を進む。裨益すること多し。高虎敬重す。一寺を建て翁を任せしむ。翁嘗て講義の終に、侯に告て曰、人の禽獸に異なる所以は、能く人道を行ふを以て得ず。今禽獸を以て譬ふに、君公は虎狼也、人実には畏る。臣等は狐犬なり、人実には侮る。其畏ると侮ると異なれども、其獸たるは一なり。侯笑て曰、先生の言、余り過たるに非ず那。當時聞者驚愕せざる者なしとぞ。此事鳩巢集に見ゆ。寛永七年、高虎卒す。嗣君学を好まざ。辞して京都に適き、経を講ず。聴徒多し。翁の上国にあるや、近邦の諸侯等、其賢を聞き、召請して教授を受る者、往々ありしとぞ。翁又上国にありし時、桂庵著述の家法和点寛永元年、梓行文之点の四書新註寛永二年、梓行周易伝義寛永四年、梓行及び文之著述の南浦文集寛永六年、梓行砭愚論、恭畏問答等に、跋を以て梓行す。是皆俸禄の余金を以て、其費用に供す。凡皇国四書新註、周易伝義の板行は是を以て始とすといふ。天和三年、長尾某梓行する四書朱註道春点の巻尾に曰、本朝釈元江時講朱註於御筵、近代南浦創加訓点、羅浮復潤色云々。此元江とは僧玄恵の訛なり。南浦は文之和尚なり。羅浮は

林道春なり。其後五六年を過ぎ、文禄三年、大龍寺第五世住持不門和尚、南浦行状を著し、亦此事を言ふて曰、四書和訓、師嘗所著如羅山点、皆蹈師塵云々。此文にて、四書新註の板行は、寛永二年の始めたること明なり。既にして翁屋久島の本邑に帰る。俸禄の余金を以て親族郷人の貧なる者に施す。九年、琉球国に適く。翌年、明主由檢廟号思宗、年号崇禎、其臣社三策を遣して、中山王尚豊を册封す。時に明人梁沢民に値て、屢経義を討論す。沢民は秀才の聞えある者なり。翁を敬重して、其所居を顧天庵と名づけしとぞ。中山王礼して師とし事ふ。此時、琉球文教いまだ布かず、士民礼義を知らず。翁教るに人倫を以す。上下愛戴して、徳に帰し、化を仰ぐ。先是琉球経書を読む、皆漢音を用て、和読を知らず。翁授くるに文之点の四書を以てす。是より琉球始めて和読を知り、今に至て國中十分の八は、文之点の四書を用ゆといふ。天保十三年壬寅、中山王尚育、賀慶使を江都に遣す。大坂に於て琉球人、文之点の四書を買ひ帰ること、數十百部に至る。当時文之点の板行四書小き故、買ひ尽せしかば、新に板に搦らしめて買ひしなり。是琉球は、文之点を尊ぶ故なりとぞ。翁の文之点を琉球に弘めし証を見るべし。其和漢言読法の如き、久米村の学校は、唐音和読兼習ふといへども、其外百里都及び國中は、和読の訓点本をもちゆといふ。翁居ること三年にして本邑に帰る。禄を郷党に賑すこと始めの如し。既にして寛陽公命ありて、翁

を本府に召す。蓋翁を本府に召せしは寛永十七年なり。正保二年乙酉、翁の愛甲喜春に贈る文に、先是五六年前、有官命、使予至鹿兒府、云々の語あり。正保乙酉より逆に数れば、五六年前は、寛永十七年に當る。藩人の口碑に曰、寛陽公江都にあり、水戸侯光圀に問曰、今儒を学びんとす、當時誰をか師とせん。侯曰、貴藩の如竹、是其人なりと。公因て翁を召て、経を聴くといへり。其講義を聴く。郭内に一寺を創建し、本佛寺と号す。翁をして住しめ、禄三百石を賜ふ。其地は今の府城の北麓、六箇所宅地是なりといふ。翁経を講じ、君道政事に至つて、顔を犯し直言し、忠益を弘めける。公素より寛弘の量なれば、甚信用し玉へり。正保元年、翁病ありて、暇を乞ふて本邑に帰る。前に出せる藩相島津久元、山田有榮、六月五日の書は、此時の事なるべし。明年、復船を遣して翁を迎へ至る。経を講ずること始めの如し。其後衰老を以て頻に職を辞して帰らむことを請ふ。遂に是を許し、養老の俸として、禄二百石を賜ふ。藩相島津久通、官署に於て命を伝ふ。翁恩を謝し、対へて曰、臣は出家なる故、一身唯衣食あれば、外に望みなし。今國中を見るに、古来忠勞ありし士人の子孫、貧窮の家少からず。彼に賜はること然るべしとて、余り固辞するを以て、久通稍怒りを生じて曰、貴僧はもはや聖人なる歟、聖人臭きことを言はるゝとありしかば、翁頭を挙げ、色を正くして曰、拙僧少きより、

一度は聖人ともいはれんと志し、其道を学びけれども、終に其心覚えもなかりしに、只今大人の鑒定^{メキキ}にて、聖人の臭みありとす。苟も聖人の香ほりにてもあれば身に於て本望なりと対へしに、久通黙然として言なかりしとぞ。時に本佛寺後任の議ありければ、法華宗の徒、府下に法華宗の大刹なし、故に翁を開山とし、寺を建置べしと請ふ者ありけれども、翁以為く郭内に大刹あること無益なり。禄三百石あれば、巨室の一士立べしとて、従はず。遂に寺を廢し、院房を売り、其金を携へて本邑に帰り、以て邑人の貧困に施しける。其本邑安房村の地たる、汲水遠くして、土人悉く苦しむ。又其金を費し、明星峯^{ダク}といふ山より出る川を引き、其間五町余、石を砕き地を鑿り、川を村中に通ず。於是闔村大に喜ぶ。是を用本府の人、翁の金を携へ帰りしを聞て、誹謗して以為く、如竹の欲猶存すと。翁の帰て民を利するを聞て、言者始て服しぬ。既にして翁又浪華に至て寓止し、朱学を教授す。是時翁既に八十に近し。猶能く精爽強力にして、祁寒大暑を以て廢せず。鳩巢如竹伝云、其後來寓居大坂、教授不教歳而還云々。翁在大坂、人興之相識、為余説翁之事、頗詳。其来大坂、年近八十、猶能強力講書、不以祁寒大暑廢云々。此伝を見て翁の老後、大坂に適きしを證すべし。居ること数歳ならず、本邑に帰る。明暦元年五月十五日、本邑に卒す。

春秋八十六歳なり。寛陽公命ありて、其墓を建玉ふ。翁の為人や、剛毅にして大節あり。徳器粹然として人望んで畏服す。其学実行を以て本とし、博渉を務めず、詩賦を喜ばず。今所伝の詩文、僅に十余首を見るのみ。最四書集註に精はし。晚年特に濂洛の書を閲して、吾早く是に熟せば聖人に成得べかりしといひしとぞ。終身僧形にして本佛寺の住持たれども、儒業を主とす。平素能人を教育し、面前には其過ちを告げ、退ひては其善を称す。仁信の心深く、行状廉潔にして、見識明達なりしかば、邦君以下、大臣士庶に至つて、敬礼せざる者なし。其郷党の如き、今に至て徳を仰ぎ、常に如竹先生カチと称して、忌日には必ず祭を設く。尊重すること神の如しとぞ。翁嘗て寛陽公に侍し、経を講せし時、反復精詳にして、甚だ長かりしかば、公倦て座を去る。翁起て曰、聖經を講ずる、半に起つべからずと。公廼ち本の座に就く。翁の直言如此の類多し。翁の上国に在し時、一諸侯の嗣君、勇を好み暴悪なりしかば、其侯翁を請ふて教授せしむ。嗣君喜びず。始めて引見の時、告て曰、吾は勇を好む、先生は儒者なり、何を以てか告ん。翁曰、今嗣君勇を好むといふ、私かに感称す。儒道は勇を本とする者なりとて、累りに古今勇武の事を挙て談ぜしかば、嗣君其意表に出て大きに喜び、翁を親近す。一日翁告て曰、勇に大小教等あり。天子諸侯の勇

は、乱を撲ひ国を治め、姦を祛り賢を用ゆ。是勇の大なる者なり。匹夫の勇は、劍を撫して人に敵し、一人に勝つことを求む、是勇の小なる者なり。今嗣君は、其身諸侯にして、其所好は匹夫の勇のみ。何ぞ勇の大なる者を好まざる那。嗣君赧然として恥る色あり、是より其心を改て善人に化す。翁剛直といへども、権宜に通ぜる如此の類なりとぞ。翁の本邑にありし時、一歳甚饑饉して、土人本府に告て、救米を請ふ。海上順風なくして、糧船久しく至らず、土人飢に及ぶ。翁其寺の米穀を悉く出し、村人に分ち施しけるに、寺には僅に三日の食を残す。村民恩を謝し、再三請て曰、此米は和尚の所蔵なり、自ら其食分は残し賜ふこと然るべし。翁曰、米穀は天の人命を續く為にある者なり。衆人餓死して、我独り生くべけんやと。然るに其三日の内、本府よりの糧船至りければ、衆と飢餓を免れける。翁仁廉如此の類あり。屋久の俗、古来山中の大杉樹は、神木と称じて伐ることなかりしかば、翁其良材の世に不用なるを惜み、山中に入り、一七日岳神に請ひ、伐て世用に充んことを禱る。山を出、島人に告て曰、吾岳神へ禱るに、木を賜ふべき靈応を得る故、今より以後、伐て世用に備ふべし。唯其伐る時、伐て伐れざる者は伐るべからず。是神の禁ずる木なり。一説に、斧を一夜杉木に掛て、斧の倒れたる者は伐るべからず。是神の賜はらざる木なりとい

へり。是より閩島始て杉木を伐始めけり。今に至て上下其利を受く。又安房川に深淵あり、河伯住居するとして、土民時々亡失することあり。一村患とせしに、翁親から淵に臨て、河伯を警戒せしかば、是より其怪止しとなり。此等の事、翁の功にて、後世に至り、徳沢を残せり。翁門人多し。東郷九右衛門重経、愛甲喜春最著はる。重経門人に、山口仲左衛門治易あり。治易門人に、伊集院仁左衛門俊矩あり。俊矩は、慈眼公に侍読す。其名士たる、人の所知なり。喜春名は季定、日州志布志の人、寛永十七年、屋久に渡海して、学を問ふ。既にして歸り、復至り、前後凡從遊すること六年といふ。萬治中、升て本府の士班に轉す。四書闇書十二卷あり。其記録に由て、翁の事実はること多しといふ。翁の伝は、鳩巢文集、諸家人物志、斯文源流に出つ。其外諸書に見ゆ。斯文源流には、翁と那波活所、藤原焯窩門の高足なり。は剛直不撓、古人の風ありと称す。翁の学文之に出づ。文之の名、翁に至て更に振ふ。海内に文之、如竹と並べ称す。翁を比するに、博学宏才文之に及ばずして、其徳器名節、是に過ぐ。近古儒学の盛に興る、焯窩、道春、闇齋等、教誘の力といへども、我藩の文之、如竹は、別に一家を創めて、儒業を開明す。其功大なり。翁の如き、真に希代の偉人といふべし。